京都精華大学 広報誌

木野通信

KINO PRESS.
KYOTO SEIKA UNIVERSITY

第73号
2019 Dec.

特集

未来を自らつくりだす人を育てるために——新学部設立の背景と意義

特集２　「京都精華大学展」の舞台裏から
卒業生インタビュー　イケガミヨリユキさん／ヒスロム

特集

未来を自らつくりだす人を育てるために

――新学部設立の背景と意義

2021年4月、京都精華大学は新たに2つの学部を開設します。グローバル化する世界を見つめ、体験的に学ぶ「国際文化学部」と、テクノロジーを駆使して新しい表現を追求する「メディア表現学部」。共通する目標は「イノベーション」。未来を自らつくりだす人間の育成をめざします。新学部設置の背景とねらいを、本学理事長・石田涼に語ってもらいました。

「2050年の世界」を見据えた2つの新学部

「誰かがつくったルールや、今ある枠組みのなかで右往左往するのではなく、自分自身で新しい社会のあり方を構想し、つくり出していけるような人間を育てていきたい。それこそが、本学の建学理念である『自由自治』を体現する、自由な人間のあり方だと思います」。

石田理事長は、2021年から新しく2つの学部を設置する目的についてそう語ります。

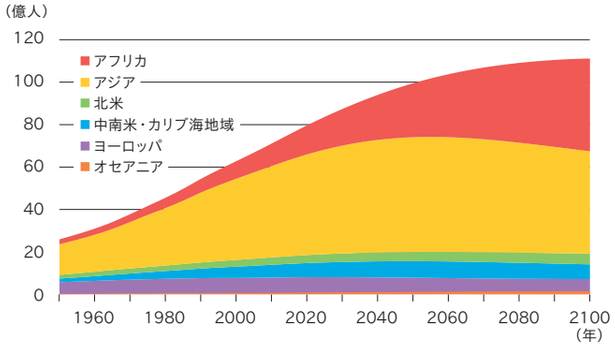
視線の先にあるのは、大きく変化していく世界やマーケットの動向、そして、ICT(情報通信技術)やAI(人工知能)を中心とするテクノロジーの進化。今から約30年後の2050年という未来を見据え、新たな時代の要請に対応できる大学教育をめざしています。

たとえば、世界の人口分布。日本は2050年に9515万人と、1億人を切り、高齢化率が4割に達する一方、働く世代や子供の数はどんどん減っていくと推計されています。これに対して、アフリカ・アジアの人口は増え続け、経済成長率(GDP)で見ても、ナイジェリア、エジプト、南アフリカなどのアフリカ諸国、ベトナム、インド、バングラデシュなどの東南アジア諸国が上位を占めると見られています。人口動態に応じて、生産や消費や労働など、経済活動の中心も移り変わっていくのです。

世界の企業の時価総額ランキングで、平成元年には上位を独占し、50位以内に30社以上が入っていた日本企業は、その後の30年でトヨタ自動車(35位)だけになっています。合併や買収などで名前が消えた企業も少なくありません。

「こうしたデータを見ても、大きな企業や組織に入れば安心という時代はもはや完全に去り、再びそういう時代が来ることも考えられません。だからこそ、これまでになかった新しい仕事や価値や表現を生み出して、社会を変えていくイノベーションの力が必要になるのです」。

グローバルとローカル。テクノロジーとアートやデザイン。2つの学部がめざす教育の方向性から、イノベーションに欠かせないキーワードが浮かび上がってきました。



今後人口の大幅な増加が予測されるアフリカ、アジア
(UNITED NATIONS, *World Population Prospects 2019* を基に作成)

グローバルとローカルをつなぐ「国際文化学部」

まず「国際文化学部」は、現在の人文学部を改組して設置し、2つの学科を設けます。アフリカ・アジアに重点を置き、グローバル化する世界を見通す力を養う「グローバルスタディーズ学科」と、日本の文学・歴史・社会・文化を研究対象とし、日本や京都への理解を深める「人文学科」。いずれも、現地でのフィールドワークを通した体験型の実践的な学習が特色になります。現在の人文学部でも、30年前の学部開設時から伝統的に半年間のフィールドワークが行われてきましたが、これをもう一度、はっきりと打ち出す意味を、石田理事長はこう語ります。

「これだけインターネットが発達した時代には、知識や情報だけならパソコンやスマホで得られる。では、大学の使命とは何か。それは今まで出会ったことのないものに出会う場所であること、未知なる世界へのアクセスを容易にすることだと思います。モニターや本からはわからない現場のにおいや空気感を、五感を働かせて理解する。そこから研究を深めてほしいと考えています」。

「国際文化」と名前の付く学部は数多くあっても、京都精華大学のグローバルスタディーズ学科のように、アフリカ・アジアに重点を置き、さまざまな側面から総合的に学べるところは、日本ではまだほとんど例がありません。現在、両地域で大学間連携や交換留学をする提携校を開拓中で、ここでは西アフリカのマリ共和国出身のウスビ・サコ学長の存在も強みになっています。

また、グローバル化が進めば、人やモノや情報の国境を越えた移動が活発になり、これまで以上に日本へ来る外国人も増えます。このため、日本や京都という足もとの歴史や文化を掘り下げ、伝統産業からマンガなどのサブカルチャーまで深く理解したうえで情報発信やコミュニケーションをする、つまり、ローカルとグローバルをつなぐ力がますます求められます。人文学科は、この要請に応えられる人を育てます。

「日本語教師の資格を取得しやすくなる科目群も全学共通で置いています。ここで学んだことが、世界へ出て行き、交流するツールになればと考えています」。

京都精華大学の国際文化学部は、グローバルとローカル両方の視点から、多様化する社会や文化を見つめ、常に世界へと開かれた教育をめざしているのです。

国際文化学部ではフィールドワークが必修。今まで出会ったことのない人やモノに触れる

イノベーターを育てる「メディア表現学部」

一方の「メディア表現学部」は、現在のポピュラーカルチャー学部を発展させる形で設置。学科は1つで、2年生からメディア情報・イメージ表現・音楽表現の3つの専攻に分かれます。メディアとコンテンツの分野で新しい価値を創造する「イノベーター」を育成したいと石田理事長は語り、イノベーションとは何かについて、象徴的なエピソードを引用して説明します。

1900年代の初頭、ニューヨークの道路には馬車が列をなして走っていましたが、十数年後には、それがすっかり自動車に変わりました。この変化をもたらした自動車王のフォードは言ったそうです。「もしも大衆に、より速く移動するために何が欲しいか尋ねたら『馬車を二頭立てから四頭立てにしてほしい』と答えただろう」と。つまり、イノベーションとは、「今ある物を改良する」のではなく、「まったく新しい価値を創造する」ことだという話です。

世の中の暮らしや常識を変えるには「飛躍的な、別のステージに移る発想」が必要であり、それを自ら考え出せる人を育てたいと石田理事長は言います。

このためメディア表現学部では、複数の分野の知識や技術を総合的に学ぶことになります。プログラミングを中心とした工学・エンジニアリング系の科目、メディアや社会の構造を理解する社会学系の科目、クリエイティブな発想を育てるアートやデザイン系の科目、それに、企業と連携して実践的に学ぶ経営学系の科目などがプログラムの柱です。

メディア表現学部は、テクノロジーを駆使し、創造性をビジネスに結びつける人材を養成

IT関連のテクノロジーを学ぶ工学・エンジニアリング系の授業は、理数系のイメージがありますが、教員に就任予定のプログラミング教育の第一人者によれば、必ずしも高いレベルの数学的な力が要求されるわけではありません。初心者や数学が苦手な人も、問題なく学べる教育方法を用います。AIの専門家も就任予定で、この分野に特化して、より深く学ぶことも可能です。

イノベーションを基礎づけるリベラルアーツ

ただ、ここでより重要なことは、単にコンテンツやメディアの制作スキルを身につけるのではない、ということです。ソフトの扱いに習熟し、求められたものをつくるだけでは、先の例に挙げた「馬車の馬を増やす」ことと同じです。そうではなく、本質的な課題は何かをつかみ、解決方法を構想できる人をどう育てるか。そこで重要になるのが、アートやデザインに基づく発想力と思考力です。

「今、国際的に注目されている塩田千春さんという現代アーティストがいます。彼女は本学の洋画コースの卒業生ですが、学生の時に油絵ではなく、パフォーマンスやインスタレーションを追求してきました。手法や形式ではなく、人間の感情に根源的に訴えるものがあるからこそ、彼女の作品は、あれだけの人気を集めるのだと思います。また、今年は『あいちトリエンナーレ』をめぐる事件もありました（展示作品の一部に抗議が殺到して展示が一時中止され、国の補助金が事後的に不支給となった）。アートとは、狭い意味の美術手法にとどまるものではない。国家や社会の価値観を揺さぶるほどの問題提起をする力があるのです」。

デザインも同様です。

「一般にデザインと言えば、きれいな形を整えることと思われますが、それは『スタイリング』と呼ばれるもので、本来のデザインとは課題を解決することです。既存の手法を使って上手に作品をまとめるのではなく、本当にクリエイティブな発想と、作品をプロデュースできる力が必要なのです」。

石田理事長は、スティーブ・ジョブズの言葉を引きます。「われわれは常に、テクノロジーとリベラルアーツの交差点に立とうとしてきた」。

これは、アートやデザインを含むリベラルアーツの復権を全学で掲げる本学のビジョンとも合致します。メディア表現学部も、国際文化学部も、こうした思想のもとに誕生するのです。

ソーシャルビジネスの起業を支援

では、新学部で学んだ学生には、どんな進路が想定されるでしょう。

国際文化学部であれば、国際的な企業やNGO、また観光や旅行やイベント関連への就職が考えられます。メディア表現学部なら、IT企業、コンテンツビジネスや広告制作の企業、あるいは、起業家として独立する道もあるでしょう。

さまざまな進路が考えられるなかで、大学が特に力を入れて支援したいのは「ソーシャルビジネス」だといいます。社会問題を解決するために自ら起業し、世界や地域社会に貢献していくような働き方です。

地球規模で見れば、貧困や格差が深刻化し、環境破壊が進み、紛争や差別がなくならないといった課題を人類は抱えています。国内を見ても、冒頭に挙げたように人口減少と少子高齢化で地域が衰退し、都市部でも貧困や格差の問題が生じています。近年頻発する災害は地球温暖化の影響とも言われ、環境問題も他人事では決してありません。

こうした世界的・社会的課題を、ボランティアや寄付に頼るのではなく、投資を呼び込んで事業化し、持続的に取り組んでいく、つまりビジネスとして成り立たせる起業家が今、若い世代を中心に増えています。

「国境を越えて新しいビジネスを展開するには、グローバルな視点と、ITやプログラミングといったテクノロジーの力は欠かせない。新学部ではその点を強化し、スタートアップ（起業）を支援していければ」。

また、新学部開設と同時に、学部横断型の「人間環境デザインプログラム」も開設。ここでは、現代社会の諸問題の解決に、建築・都市研究の面から取り組みます。

◇

2050年の世界を見据え、これからの学生たちには「チェンジメーカー」であってほしいと石田理事長は言います。新しい価値観と行動で社会に変化をもたらす存在になれ、という願いです。同時に「私たち京都精華大学自身がチェンジメーカーであり続けないといけない」と。

2021年に開設される2つの新学部は、さまざまな挑戦をしてきた精華の新たな一歩となります。

社会に変化をもたらす2つの新学部

2021年4月、未来を創造する表現の大学にふさわしい新学部が始動。
社会と人間のこれからを見つめ、イノベーションをもたらす人間を育てます。

メディア表現学部

メディア表現学科

メディアとコンテンツに関する幅広い知識とビジネス感覚を身につけた、新しい価値を創造するクリエイターを育てます。1年次にメディアや最先端テクノロジーの基礎を理解した上で、2年次以降は「メディア情報」「イメージ表現」「音楽表現」の3専攻に分かれます。現代社会をリサーチする力、音楽や動画といったコンテンツ制作の技術、これからの時代の表現を可能にするプログラミング、AIなどの技術を身につけるとともに、企業とのコラボなど実践的なプログラムを導入して創造性をビジネスに活かす力を鍛えます。

国際文化学部

人文学科

体験的な学修を通して日本や京都の文化の理解を深めます。1年次には日本の文学、歴史、社会、文化への理解を深め、文化を構成する要素と現代社会の成り立ちを理解しながら興味のあるテーマや専攻をしぼります。2年次以降は、「文学」「歴史」「社会」「日本文化」の4専攻に分かれて学びを深めます。3年次にはキャンパスを離れ、半年間のフィールドワークを実施。自分の興味や関心に従って国内を中心に自由に滞在先を選び、自主的な研究活動を体験します。自国の文化を知ることで、グローバル化する社会のなかで世界に向き合います。

グローバルスタディーズ学科

地域の文化や暮らしに大きな影響を与えるグローバル化について多様な側面から考察する学科です。近年さまざまな面で世界から注目される、アジア・アフリカ地域に重点を置いて学び、これからの世界を見通す力を養います。1年次にグローバル社会や文化の基礎知識を得ると同時に、短期フィールドワークを経験します。2年次以降は「グローバル関係」「グローバル共生社会」「アフリカ・アジア文化」の3専攻に分かれ専門的に学びます。3年次には各自のテーマにもとづいた半年間の海外フィールドワークで、自分の研究を深めます。

学部横断型学位プログラム

人間環境デザインプログラム

新学部を加えた5学部を横断しながら学ぶ、従来の学問分野にとらわれない学位プログラムを新設。より良い暮らしやライフスタイル、都市や社会環境を創造するクリエイターをめざして、学部をこえて居住空間やコミュニティなどの生活環境、地球環境等を学び、建築・都市研究の面から現代社会の諸問題解決に取り組みます。

取得できる資格　一級建築士（受験資格）／二級建築士（受験資格）

■2021年度からの学部構成

国際文化学部 NEW	人文学科	文学／歴史／社会／日本文化
	グローバルスタディーズ学科	グローバル関係／グローバル共生社会／アフリカ・アジア文化
メディア表現学部 NEW	メディア表現学科	メディア情報／イメージ表現／音楽表現
芸術学部	造形学科	洋画／日本画／立体造形／陶芸／テキスタイル／版画／映像
デザイン学部	イラスト学科	イラスト
	ビジュアルデザイン学科	グラフィックデザイン／デジタルクリエイション
	プロダクトデザイン学科	プロダクトコミュニケーション／ライフクリエイション／ファッション
	建築学科	建築
マンガ学部	マンガ学科	カートゥーン／ストーリーマンガ／新世代マンガ／キャラクターデザイン
	アニメーション学科	アニメーション
人間環境デザインプログラム NEW		

「京都精華大学展」の舞台裏から

――大学キャンパスで開催する卒業・修了発表展の進化をお見逃しなく

学生たちの4年間の集大成となる作品が揃う卒業・修了発表展。2017年度以降は本学のキャンパスで開催しています。監修を担当する、吉岡恵美子副学長（芸術学部教員）に、前回の成果と今年度の見どころを聞きました。

吉岡恵美子
教学担当副学長／芸術学部教員
2014年まで金沢21世紀美術館でキュレーターとして勤務。展覧会レビュー執筆等、批評活動も行う。

Q 前回の卒展はいかがでしたか。

前回は会場を京都市美術館から学内に変更した2回目にあたり、よりダイナミックな作品が多く登場しました。

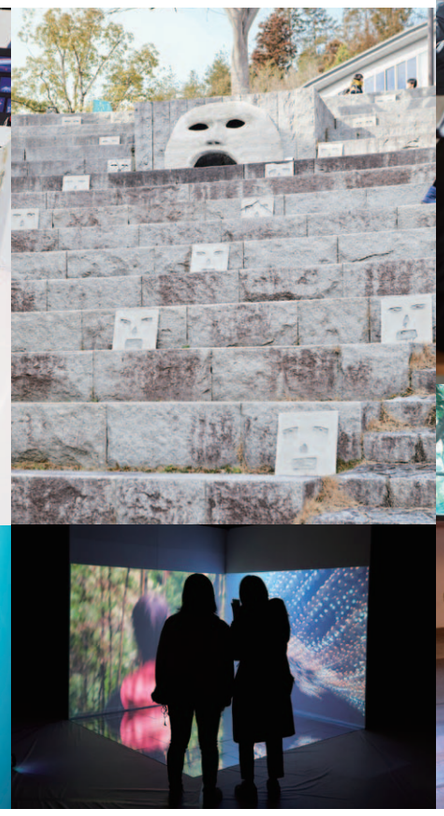
規定の展示場所以外のパブリックスペース、例えば屋外の池の周りや通路に展示したいという学生も多く、場所と作品が響きあう展示が印象的でした。ある学生は交渉の末、芸術学部の教員の研究室にあるもの全てを丸ごと赤いニットで覆うことで、場を変容させる作品を制作しました。

そして、各学生に振り分けられるスペースも広くなったので、スケールの大きい作品も増えました。陶芸の学生と日本画の学生とが一つの教室で展示して、専攻を越えた表現の共鳴をみせる試みや、身の回りにある何気ないアイテムを利用して見る人の感覚や価値観を揺さぶる「日常の魔法」といえるような、ユニークな作品も登場しました。会場では、学生が来場者に作品の説明を行い、コミュニケーションをとる場面もみられました。主な成果物が論文となる人文学部では、論文集を置いておくだけでなく、テーマに関する書籍や資料をセレクトして一緒に展示するなど、来場者により興味を持ってもらう工夫をしていましたね。

Q 今回の課題と抱負をお聞かせください。

今回は3回目の学内開催ということで、さらに思いがけない発想の展示が出てくるのではないかと考えています。学生たちが自ら考え、準備し、創作した作品を、より多くの人に見てもらい、来場者の方々と交流が生まれることを望んでいます。学生にとってはセイカで学び考えたことを、誰かに伝えるとても良い機会だと思いますから。そのために、昨年以上に会場の導線やインフォメーションを改善して、より見て回りやすい展覧会をめざします。

来場者の期待を上回るような、また学生たちの卒業後の活動や仕事につながっていくような、意義深い展覧会にしたいですね。



Q 鑑賞のポイントは？

卒業・修了発表展は、自分の表現を他者に伝えるための、在学中最後にして最大の機会です。

約700名の作品が展示されますので、会場のインフォメーションで情報を入手し、優先順位を考えて巡られることをおすすめします。イベントを行う日もありますので、インフォメーションで情報を確認してみてください。作品の近くに控えている学生や教員たちに、作品の意図などを聞いてみるのもおすすめです。ぜひ声をかけてみてください。場所が持つ意味や風景をガラッと変えてしまうタイプの作品は、その場所の元の姿を想像していただくと楽しいと思います。

京都精華大学展2020
開催案内
2020年2月12日(水)～16日(日)
10時～17時
［場所］京都精華大学　※入場無料
体育館を含めて、ほぼすべての校舎を使用して行います。ぜひお越しください。

卒業生インタビュー

独自の道を歩む京都精華大学の卒業生に、現在の活動や今後の夢、セイカの思い出を伺いました。

ヒスロム
hyslom

アーティストグループ

星野 文紀さん　デザイン学部 建築専門分野 2009年卒業
吉田 祐さん　デザイン学部 建築コース 2010年卒業
加藤 至さん　芸術学部 テキスタイルデザイン専門分野 2009年卒業

2009年結成。2012年第6回AACサウンドパフォーマンス道場で優秀賞を受賞
2018年「平成30年度京都市芸術文化特別奨励者」認定
2019年、ヒスロム初作品集『ヒスロム ヒステリシス/hyslom hysteresis』刊行

美術館での展覧会をはじめ、パフォーミングアーツ分野でも活動を行う3人組のグループ「ヒスロム」。結成のきっかけは、セイカで出会った加藤至さん、星野文紀さん、吉田祐さんが、ある場所へ通うようになったことでした。「僕と吉田君は、地元で大規模な街づくりが始まっていることを知り、星野君を誘ってそこで遊ぶようになりました。山が切り崩され、見慣れた景色が刻々と変わっていく。そのエネルギーを体感し、記憶に留めたいと思ったんです」(加藤)。「斜面に耳をあてるとズズズとトンネルを掘る音が聞こえたり。その時にしか体験できないことを3人で共有し、それがヒスロムの原点になりました」(吉田)。その場所で、変わりゆく景色を撮影した映像を発表する機会を得たことが本格的な活動の始まり。やがて、遊びを通して身体と土地の関係を探る「フィールドプレイ※」を各地で実践するようになり、遊び場の記憶を彫刻や舞台へと発展させていきました。「今も3人で時間を共有することを大切にしています。三人三様の考えを一つの作品にしていくには時間がかかるし、プロジェクトを始めたら広がる一方で終わりは見えないですが、自分たちが納得しながら取り組んでいきたいと思っています」(星野)。

「終わらない」「焦らない」は、〝遊び〟の概念を中核とするヒスロムらしいスタイル。そんな3人にセイカの魅力を尋ねると、星野さんは、ずっと入り浸れる刺激的な楽しさ、吉田さんは個性豊かな人との交流、加藤さんは、季節をしっかり感じられる環境を挙げました。

今、彼らはある「石」との偶然の出会いに着目した新たなプロジェクトを始動させ、ポーランドでの展示を準備中です。「展覧会にはセイカの同級生や学生にも来てもらいたい。皆の協力を得ながら一緒に展覧会が創れたら、と思っています」(吉田)。

※劇団維新派 故松本雄吉による呼称。

セイカの思い出

卒展後コンテナに捨てられていた模型を見つけて「模型が飛ぶ」撮影をしていました。

デンマークからポーランドに運んだ「石」

イケガミ ヨリユキさん
Yoriyuki Ikegami

画家・イラストレーター

マンガ学部
2016 年卒業

独特の世界観が詰まった作品集『PETALS』。巻末には恩師からの寄稿文も

フリーランスの画家、イラストレーターとして活動しているイケガミヨリユキさん。SNSも積極的に活用しており、Twitterアカウントには8万を超えるフォロワーも。子どもの頃からとにかく絵を描くことが好きだったイケガミさんにとって、絵と真剣に向き合う仲間たちと出会えたセイカは、とても居心地のよい場所でした。在学中に教わった先生からはさまざまな影響を受けたといいます。「制作に対する考え方が変わりました。絵画とはこうあるべきだと自分が勝手に思い込んでいた縛りから放たれて、もっと自由に絵を描くことそのものを楽しめるようになったんです。また、先生に誘われて展示会に足を運ぶなどの経験を重ねたことで、世界が広がりましたね」と、イケガミさん。卒業後にフリーランスでの活動を選択したのも、作家として活躍する先生たちの姿に背中を押されたからです。

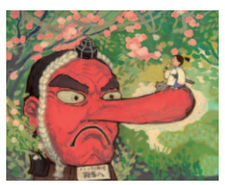
2016年の作品『夜は歌う』

現在は個展やグループ展を開催するほか、イタリア・ボローニャ国際絵本原画展への出品、ミュージシャンのCDジャケット、ツアーグッズの製作などにも携わっています。個展を訪れる人との交流を通じて知ったのは、自分の絵が、他の人に共感してもらえる喜び。自身の作品が誰かの部屋に飾られ、その人の生活の一部となって共に時間を過ごしていくことを想像すると、「面白くもうれしくもあり、不思議な感覚」だといいます。最近はSNSを活用することで、新たな仕事の依頼など活動の場が広がっています。昨年は韓国で個展を開催しました。「わざわざ日本語で書いた手紙を持って個展に来てくださった人もいてうれしかったですね。たとえ言葉は違っても感情は共通する部分が多いんだなと感じます」と、作品を通じて生まれる交流も楽しみのひとつとなっています。

そんなイケガミさんに今後の展望を聞いてみると、とてもシンプルな答えが返ってきました。「絵を描き続けることができたら、それが一番うれしい」。

セイカの思い出

現在の画風はセイカ在学中に確立。当時から独特な色づかいが評価されていました。



研究報告

京都精華大学で行われている研究について、教員が活動内容をご紹介します。今回は2019年度の学長指定課題研究(※)から、学内のダイバーシティ推進に向けて共同研究をおこなうティーター・ジェニファ・ルイーズ先生に語っていただきました。

※学長が指定する特定の課題・テーマに則した先進的な共同研究を推進する制度

京都精華大学におけるダイバーシティとインクルージョン実態調査研究

わたしたちの研究は、京都精華大学におけるダイバーシティ、インクルージョン(あらゆる人を組織の一員として歓待すること)に関する現状把握と、学生からの意見や提案を集め改善につなげることを目的としています。研究には教職員、学生、他大学の研究者など異なる立場の6名が参加しており、出身も日本、カナダ、ベネズエラ、ジャマイカとさまざま。多様なバックグラウンドをもつメンバーそれぞれの違いを生かして、多角的な視点から研究を進めています。

京都精華大学では、これまでにもダイバーシティ推進センターの設置や一人ひとりの個性にあわせた修学支援などに大学全体で取り組んできました。多様な違いを認め合い成長できる環境づくりに日々尽力していますが、留学生と日本人学生の交流促進やキャンパスのバリアフリー化など、改善すべき余地はまだまだあります。

研究活動としては、アンケート調査の実施や先行事例の調査、ワークショップの開催などを行っています。学生を対象にしたアンケート調査は回答率も高く、改善のためのすばらしいアイデアも寄せられました。今年度は現状把握と交流促進のための場づくりを中心に行いますが、今後はこうしたアイデアの活用にも取り組みたいと考えています。

自分と似ている人とばかり一緒にいると、だんだん「同じことが当たり前」になってしまい、異なる価値観に触れることが少なくなります。自分とは違う技術や経験を持った人たちが周りにいる環境は、より優れた、新しいアイデアが生まれやすいものです。学生が「この大学で学べば、視野を広げることができる」と感じられる、より良いキャンパスづくりに向けて、さらなる調査・研究を続けていきます。

ティーター・ジェニファ・ルイーズ
(研究代表者／マンガ学部教員)
米国出身。2002年に来日。人種・民族やジェンダー、アイデンティティの問題への理解を深める教育の方法を探求している。

学長指定課題研究一覧(2019年度)

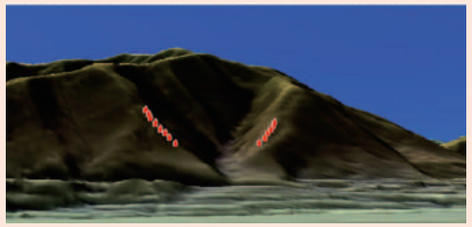
- 『京都精華大学における、“GLOBALな視点”から導く環境整備について』新井清一(デザイン学部)
- 『アフリカ・アジア現代文化研究推進のための国内研究ネットワーク構築』上田修三(事務局)
- 『伝統工芸の特色を生かしたファッションにおける魚革の活用についての研究(欧州委員会「ホライズン2020」獲得の多国間産学連携共同研究「FISHSKINプロジェクト」の一環として)』小北光浩(ポピュラーカルチャー学部)
- 『大学機関における芸術図書館員養成の検討一学内関連機関と一体となった実践プログラムの検証と学内での蓄積・共有』佐々木美緒(人文学部)
- 『留学生のための日本語学修支援のあり方に関する研究』住田哲郎(マンガ学部・共通教育機構)
- 『新コミュニケーションツール「キャンパス通貨」流通に関する実証実験プロジェクト』関口正春(事務局)
- 『人文学部CASA2年目の実践ーラーニング・コモンズ、カフェ、起業、イベントなど多様な取り組みの検討と検証ー』田村有香(人文学部)
- 『過去の卒業制作のライブラリ制作及び、卒業生データベース作成 また、これらの運用内容の研究』辻田幸廣(マンガ学部)
- 『台所プロジェクトーIC3リノベーション計画』豊永政史(デザイン学部)
- 『建築資材の再活用に関する研究』葉山勉(デザイン学部)
- 『精華大学における物販・展示・イベントをベースにしたコモンズ形成の研究』宮永甲太郎(芸術学部)
- 『アートシンキングとデザインシンキングの融合／「セイカメソッド」の研究開発』森原規行(デザイン学部)
- 『全学初年次学生を対象にした「大学入門」科目の授業デザインの妥当性とその教育効果に関する定性的・定量的研究ー学部横断型初年次教育を通した新入生の大学適応にフォーカスしてー』山田創平(人文学部)
- 『「心理教育」によるダイバーシティ推進についての研究ー心理的問題や発達障害についての理解促進を目指してー』山本有恵(学修支援センター)

木野からヤッホー

あの先生元気かな…?
そう思っている卒業生のみなさんへ、
セイカの教員からのメッセージです。

3

1



2

1.全集『い(ま)え IN-BETWEEN』
2020年3月に出版記念+新作上映会を開催予定です(相内)
2.最終講義で待っています(竹宮)
3.上が「い」の送り火のあった向山(左京区静市市原町)
下は新たに見えてきた古い時代の送り火の位置のCGです(小椋)

消えた送り火のこと、研究を続けています。

小椋 純一
人文学部 歴史専攻

日本各地で大きな災害が続きますが、みなさんお変わりありませんか。ところで、京都ではかつて五山のほかにも、いくつか送り火がありました。本学に近い市原の山にも、明治の頃まで「い」の送り火があったことを知っている人もいるかと思います。
昨年、その送り火が別の山にあったとの説を京都大学の研究者が発表し、ネットでも話題になりました。私は、地元市原の方々も困惑したその珍説を検証して、まともな根拠が何もないことを明らかにし、本学の夏の公開講座でお話ししました。
困った珍説発表でしたが、それを検証する過程で、より古い時代には、明治頃までのように山の上方ではなく、もっと下にその送り火があった可能性が見えてきました。

思えば、セイカに来てから長い時間が経ちました。

竹宮 惠子
大学院 マンガ研究科

私の大学の勤めも残すところあと半年になりました。2020年1月8日に開催されることが決定した「最終講義」が、今一番の私の課題です。「アセンブリーアワー講演会」のなかで最終講義ができることになりましたので、卒業生のみなさんにも聞いていただけるかと思います。
思わずも長い間、京都精華大学に身を置くこととなり、純粋に漫画家だけをしていた期間が30年間、大学で教鞭をとっていたのが20年間です。そう考えてみると、ずいぶん長かったなあと感慨深いです。
その間、何百人もの卒業生が巣立って行きましたが、韓国からも「最終講義に行きます!」と言ってもらえることは、本当に嬉しいことですね。

みなさんの顔を思い出しては、誇らしい気持ちになります。

相内 啓司
芸術学部 映像専攻

2006年に芸術学部造形学科の映像コースに就任して以来、あっという間に14年の時が経ちました。その間情報メディア環境は様変わりし、映像とアートの関係も大きく変わりました。映像制作で使われるメディアやソフトウェアも多様化して、日々大きな変動を続けています。映像専攻や大学院を希望する学生も年々増えています。世界各国からの留学生も加わって、国際化がどんどん進んでいます。
相変わらず東京と京都の行き来をしながら授業と研究・制作を行っている私ですが、2020年3月にはついに卒業です。ここから巣立っていった卒業生のみなさんの顔を懐かしく思い出し、また誇らしく思います。頑張ってください。

イベントレポート

アートの現場における、人権や「表現の自由」の問題を考える

2019年7月、人権を視野に入れたアートマネジメントについて考える連続講義の1回目「芸術実践と人権ーマイノリティ、公平性、合意について」が開催されました。はじめに、人文学部教員の山田創平が概論を共有。資本主義社会が含み持つ「中心と周縁」の構図をふまえたうえで、「表現の自由」の定義や、周縁からの批判的な表現活動の意義を説明しました。

続いて美術家、小泉明郎氏のプレゼンが行われました。映像というメディアの暴力性について触れながら、他者が被写体となる映像作品を制作する時の倫理、作品に対する美術家の責任について、自作を例に解説されました。

次にキュレーターの遠藤水城氏の発表。現代美術は価値が最初から決まっているわけではないことを強調しつつ、キュレーションの技術を政治的な正しさに適用する「アクティヴィズム型キュレーション」の可能性を語りました。

その後は、児童自立支援施設で性教育を教える、あかたちかこ氏を加えたディスカッションに。「合意」形成のプロセスや、美術教育と倫理の問題をめぐって、フロアからも質問が発せられ、盛り上がりを見せました。

この日は、近年ますます関心が高まっている「表現の自由」の問題を、原理的かつ具体的に再考する意義深い機会となりました。

「芸術実践と人権
ーマイノリティ、公平性、合意について」
小泉明郎×遠藤水城×あかたちかこ×山田創平
2019年7月27日（土）　京都精華大学 明窓館 2F 201教室

これからの社会のあり方を、工芸から見つめなおす

まだ厳しい暑さが続いていた9月はじめ、本学伝統産業イノベーションセンター主催シンポジウム「We-工芸から覗く未来」が開催されました。ウスビ・サコ学長による開催挨拶の後、伝統産業イノベーションセンター長の米原有二ら本学教員に学外ゲストを交え、三部構成で会が進行しました。

第一部は、本学が世界の研究者と取り組む魚革研究を切り口に、持続可能な社会と伝統産業の関わり方が論じ合われました。

第二部のテーマは工芸。「現代社会でどのような役割を果たせるのか」や「工芸が持つ自然と人とをつなぐ可能性」について議論がなされました。

第三部では、これからの工芸のあり方をめぐる意見交換を行いました。さまざまな意見が交わされるなかで、作り手だけではなく林業や漁業、農業など、ものづくりを支える人々とともに歩んでいくことの大切さが確認されました。終了後のレセプションでは、登壇者や来場者が熱心に意見や感想を語り合う様子も見られました。

本学は、文部科学省「私立大学研究ブランディング事業」の支援対象校に選定され、伝統文化を鍵とした未来創出モデルを開発しています。今回の催しは、この事業の現状を整理し、今後の教育や社会貢献活動に活かすための足がかりとするために開催されました。

「We-工芸から覗く未来」
京都精華大学伝統産業イノベーションセンター主催
2019年9月1日（日）　京都国際マンガミュージアム

芸術を媒介に紡ぎ出される、島の新たな記憶

瀬戸内国際芸術祭2019の一環として、本学有志が香川県の高見島に作品を出展する「高見島プロジェクト」が実施されました。同プロジェクトは2013年以降、芸術祭に合わせて毎回行われています。今回も芸術学部教員の内田晴之を中心に、幅広い年代の卒業生、在学生が作品を出展しました。

展示会場は島内の空き家。島の方々の協力のもと1年以上かけて家屋を修復し、作家ごとにまったく異なる作品を完成させました。

プロジェクト代表でもある内田は、かつて島で盛んに栽培された除虫菊を用いて島の再生を思わせるインスタレーションを展開。また、同じ建物の1階部分は小枝繁昭さん（美術科1973年卒業）の花をモチーフにした作品が、鮮やかに彩りました。

中島伽耶子さん（芸術学部2013年卒業）は家屋に無数の穴を開け、室内の隅々にまで自然光を取り込むことで、鑑賞者が家の中に残存する気配に目をこらす空間をつくり出しました。

そのほか屋外作品を含む13作品（うち11作品が新作）が、会期中、島内各所に展示されました。

人口の減少とともに、場所の記憶も薄れつつある高見島。作家たちと島民の方々との共同作業によって生まれた作品からは、島の新たな記憶が紡ぎ出される萌芽を感じることができました。

瀬戸内国際芸術祭2019（秋会期）
「高見島プロジェクト」
2019年9月28日（土）～11月4日（月）　高見島各所

国もジャンルも越えた幻想世界はいかに生み出されるか

本学主催の公開トークイベント、アセンブリーアワー講演会は年に8回程度開催されています。10月は、現代サーカスグループ「仕立て屋のサーカス」から音楽家・曽我大穂氏と服飾家・スズキタカユキ氏をお招きし「サーカスのススメ、越境するススメ」が開催されました。聞き手はYUYBOOKS代表の小野友資氏が務めました。

「仕立て屋のサーカス」は、音楽、光、布を駆使した即興性の高い公演で知られ、国内外で精力的に活動してきました。本講演では、これまでの活動の歩みを記録映像とともに紹介。幅広いジャンルのクリエイターをゲストに招いて行ってきた公演を振り返り、「ダンスでもあり、演劇でもあり、パフォーマンスでもあり、ライブでもあるが、明確に何とは言えない」と語りました。

また講演の後半には、「仕立て屋のサーカス」で制作・運営を担当する、本学ポピュラーカルチャー学部出身のてしますみれさんも登壇。スタッフとして加入するきっかけとなった本学での授業のエピソードが紹介されました。

国やジャンル、メディアを越境し、まだ名前もついていないものを生み出してきた仕立て屋のサーカス。活動の経緯や、環境を飛び越える力の源泉を垣間見ることのできた、貴重なイベントでした。

アセンブリーアワー講演会
「サーカスのススメ、越境するススメ」
曽我大穂×スズキタカユキ×小野友資（聞き手）
2019年10月10日（木）　京都精華大学 友愛館アゴラ

イベント情報

アセンブリーアワー講演会（2019年度後期）

※予約不要、入場無料、先着順

● 最終講義「扉はひらく いくたびも」
2020年1月8日（水）
〔講師〕竹宮惠子（本学教員／マンガ家）
〔場所〕京都精華大学
〔問い合わせ先〕
京都精華大学 社会連携センター
☎075-702-5263

ギャラリーフロール　※入場無料

〔休館〕日・祝
〔時間〕10:00～18:00

● 洋画コース安喜ゼミグループ展
「みることに触れる、描くことの現在」
12月18日（水）～2020年1月6日（月）

● タイカン後期学修成果発表2020
2020年1月22日（水）～1月24日（金）

● 2019年度「大学院1年生研究制作展（M1展）」
2020年1月28日（火）～2月1日（土）

● 修了発表展
2020年2月6日（木）～2月7日（金）

京都精華大学展（卒業・修了発表展）　※入場無料

2020年2月12日（水）～2月16日（日）
〔場所〕京都精華大学

岡本清一記念講座「日本と世界を考える」

2020年2月1日（土）※詳細は決まり次第Webでお知らせします。
〔講師〕いとうせいこう（作家・クリエイター）

SEIKA AWARD 2020

〔応募期間〕2020年1月8日（水）～2月23日（日・祝）
〔展示期間〕2020年3月20日（金）～3月25日（水）
https://award.kyoto-seika.ac.jp

セイカアワードは高校生の皆さんの自由な創作活動の応援と新しい才能の発見を目的としたコンペティションです。

※2019年12月時点の情報です

活躍する在学生、卒業生の情報を募集しています。

多数の在学生が社会貢献活動やコンテストでの受賞など広く活躍をしています。詳細はぜひウェブサイトでご覧ください。また、今後も木野通信では、活躍する在学生や卒業生の情報を紹介していく予定です。情報をお持ちの方は、広報グループまでお知らせください。

● 京都精華大学 ウェブサイト
http://www.kyoto-seika.ac.jp
● 広報グループ
kouhou@kyoto-seika.ac.jp

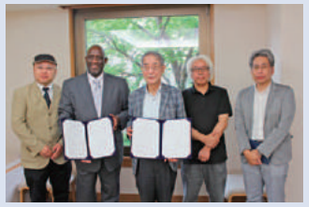
トピックス

Student 05

建築コースの学生たちが叡電「京都精華大前」駅をリノベーション

2019年10月、叡山電鉄との産学連携事業として、デザイン学部建築コースの学生たちが京都精華大前駅の駅舎のリノベーションに取り組みました。1989年に開業し、30周年を迎えた京都精華大前駅は、本学に直結する駅として多くの学生が利用しています。今回のデザインコンセプトは「ダイバーステーション（Diverse+station）」。2016年に発表した「京都精華大学ダイバーシティ推進宣言」の考え方にのっとり、多様性を表現する駅舎をめざしました。新しい駅舎は、すべての光の色が混じり合った白色、すべての物質の色が混じり合った黒色を基調にイメージを一新。メッセージボードや作品展示台も設置し、地域の方と本学関係者の交流活性化を図ります。

News 06



国際日本文化研究センターと基本協定を締結

京都精華大学と国際日本文化研究センター（日文研）は、学術交流・協力を推進することにより、相互の研究・教育の一層の進展と地域社会の発展に貢献するため、基本協定を締結しました。2019年10月、日文研の小松和彦所長や本学ウスビ・サコ学長ほか出席のもとで、調印式を執り行いました。本学と日文研は、かねてより「大衆文化研究プロジェクト」や「テレビCMデータベース研究」等の活動において相互協力関係がありましたが、今回の協定締結を機に、共同研究や人材交流、施設の相互利用を積極的に行っていきます。これにより、学術交流や研究協力が一層促進されるものと考えています。今後、学生を交えた研究交流に向けて、関係者が定期的に集う機会を設けていく予定です。

News 03

アフリカの今と未来を考察する「現代アフリカ講座」京都で開講

京都精華大学主催「現代アフリカ講座」を、2019年10月から11月にかけて、京都・四条烏丸のオープンイノベーションカフェ「KOIN」で開講しました。2018年に東京で開講し、評判を呼んだ講座の第2弾です。講座のテーマは「現代アフリカのパワーと可能性を知る～ビジネスの視点から～」。企画・ナビゲーターは日本で唯一のアフリカ出身学長である本学のウスビ・サコ学長が担当。各分野の最前線で活躍し、アフリカに造詣の深い8名の講師を招いて全5回の講座を実施しました。テーマは現地の人たちとつくるビジネスや、現代アフリカのアートシーン、アフリカ経済の未来などさまざま。現在、社会の諸領域から熱い注目を集めているアフリカの今と未来を多角的な視点から考察できる機会となりました。

Student 04

マンガ学部学生による鞍馬駅前「新・大天狗」が完成

叡山電鉄鞍馬駅前広場のモニュメント「大天狗」のリニューアルデザインとして、マンガ学部キャラクターデザインコース2年生の作品が選定され、2019年10月に晴れて完成披露式が挙行されました。従来の「大天狗」は2002年の設置以来、本学の学生や教職員からも親しまれてきましたが、老朽化に伴いリニューアルされることに。叡山電鉄と本学の共同事業として学生がデザインに取り組みました。また、台座の文字はマンガ研究科教員の竹宮惠子が担当しています。「従来の大天狗のイメージを踏襲しつつ、力強さの中に地域を見守る優しさやあたたかさを表現」したという全高4mの「新・大天狗」。鞍馬の魅力を広く伝えるための新たなモニュメントとして、鞍馬駅前にお目見えしました。

News 01

第11回会議の様子

第12回国際アジア研究会議の主催機関に決定

第12回国際アジア研究会議（ICAS）の主催機関に本学が選定されました。ICASは、オランダ・ライデンに本部を置く国際的な研究プラットフォームIIAS（International Institute of Asian Studies）によって設立された、アジアを広く学際的な観点から論じる国際会議です。2年に1度研究大会が行われ、2,000名～3,000名の参加者を集める世界規模の研究者交流の場となっています。

会議名称：The 12th International Convention of Asia Scholars (ICAS 12)（第12回国際アジア研究会議）
開催日程：2021年8月24日（火）～8月27日（金）〈予定〉
会　　場：国立京都国際会館ほか
参 加 者：世界70カ国から約2,000名を予定
運営組織：京都精華大学・大学コンソーシアム京都・JETROほか

News 02

Wallonie - Bruxelles International.be

ベルギー王国フランス語共同体政府国際交流振興庁と本学が協定を締結

京都精華大学は、ベルギー王国フランス語共同体政府国際交流振興庁（以下WBI）より、日本とベルギーの学術・文化活動の支援拠点を京都に開設するにあたり、その事務局を本学内に設けてほしいとの協力要請を受けました。WBIとの協議を経て、2019年9月、本学は要請の受け入れを決定し、正式に一般協定書を交わしました。またこの協定締結に伴い、WBIより特使セリーヌ・マリアージュ氏が、客員研究員として派遣され、本学を拠点とした活動をスタートさせています。この協定をきっかけとして、WBIと本学の共通の関心事である、文化の多様性、異文化間の対話、多言語主義が促進されるとともに、日本とベルギー間の学術協力が進展することが期待されます。

～ご支援くださる皆様へ～
（ご寄付のお願い）

本学のさらなる教育・研究活動の充実、学生活動の支援のため、
温かいご支援・ご協力を心よりお願い申し上げます。

- 寄付募集Webサイト
  https://www.kyoto-seika.ac.jp/donate/
  寄付使途はご意向に沿った運用をさせていただきます。

- 古本募金 Webサイト
  http://kishapon.com/seika/
  読み終えられた本やDVDなどが京都精華大学への寄付となります。

2019年4月から9月までに、法人・個人あわせて30件、合計956,186円のご寄付をいただきました。また、古本募金の書籍類は41件、3,823冊のご提供を受け、合計77,319円分のご寄付となりました。保護者や卒業生の方々をはじめ、ご協力いただいた皆様、まことにありがとうございました。引き続き、ご支援・ご協力のほど宜しくお願い申し上げます。

お問い合わせ（リーフレット請求先）
京都精華大学 経営企画グループ 寄付募集担当
E-mail：kikaku@kyoto-seika.ac.jp
TEL 075-702-5201
FAX 075-702-5391

『木野通信』送付先ご住所等の変更を希望される方は、
木野会ホームページまたはFAXで変更事項をご連絡ください。

京都精華大学 経営企画グループ 木野会事務局
http://seikajin.com/
FAX 075-702-5391

表紙の作品

大西晃生さん　デザイン学部イラストコース卒業
『何だって分かる、自分のこと以外なら』
素　材：キャンバス、アクリル、コンクリートブロック
サイズ：2460×2460×2430 mm

人間と存在、自他の関係性について考察し描いている他者としての「顔」。オンラインとオフラインをシームレスに移動することができるようになった現代において、人間はいくつもの自分を手に入れた。常に変化し続ける私たちのポートレート。

京都精華大学

芸術学部
［造形学科］
洋画専攻
日本画専攻
立体造形専攻
陶芸専攻
テキスタイル専攻
版画専攻
映像専攻

デザイン学部
［イラスト学科］
イラストコース
［ビジュアルデザイン学科］
グラフィックデザインコース
デジタルクリエイションコース
［プロダクトデザイン学科］
プロダクトコミュニケーションコース
ライフクリエイションコース
［建築学科］
建築コース

マンガ学部
［マンガ学科］
新世代マンガコース
カートゥーンコース
ストーリーマンガコース
キャラクターデザインコース
マンガプロデュースコース
ギャグマンガコース
［アニメーション学科］
アニメーションコース

ポピュラーカルチャー学部
［ポピュラーカルチャー学科］
音楽コース
ファッションコース

人文学部
［総合人文学科］
文学専攻
歴史専攻
社会専攻

大学院
芸術研究科
デザイン研究科
マンガ研究科
人文学研究科

※2021年度に国際文化学部、
　メディア表現学部を設置予定です。

木野通信
KINO PRESS.

木野通信　第73号
2019年12月1日 発行

京都精華大学 広報グループ
〒606-8588 京都市左京区岩倉木野町137
TEL 075-702-5197　www.kyoto-seika.ac.jp

本冊子は文部科学省「私立大学研究ブランディング事業」に係る交付金から一部支出しています。